
宵の氷鏡

千寂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵の氷鏡

【Nコード】

N6546U

【作者名】

千寂

【あらすじ】

二年に及ぶ政争ののち、安定を得た東の最果ての国――ときせ斎世。
どうやら、可愛い異母妹が帝に入内すると決まったらしい。え、
勿論私も着いて行くけれど、それが何か？ 策謀渦巻く後宮なんか
に、あの馬鹿を一人で行かせられる訳がない。――呪詛の用意は
万全、先ずは妾妃の方々に宿下がりして頂きましょう。
ああ、その前に先の政争の後始末をしなければ……

基本高スペックな主人公が、暗躍したり暗闘したり呪詛したり。

恋愛要素も有りますが、男性陣は不憫です。

演者紹介（掲載分以降のネタバレを含みます。）

氷羽 ひのわ

十九歳。 斎世国の西端、篠井の国守の一の姫。
当代一と名高い呪術師、『鵺 ぬえ』は裏の顔。

柚葉 ゆずは

十六歳。 篠井国守の二の姫。
帝の正妃として後宮に入る。

皇継 みつぎ

十九歳。 斎世を統べる若き帝。

神琉 かなな

二十二歳。 帝の兄であり、幽宮 かくれのみやの長。
『駒鳥』の名で、呪術師として通っている。 三鳥 みつどりの一

羽。

日影 ひかげ

篠井の国守。 氷羽と柚葉の父。

篩戸 ふるへ

市井の呪術師。 通称『鶯』、三鳥の一羽。

灰鳴 かいな

隠れ里、三枝 さんえいさの長の娘。 三鳥の一羽、『大瑠璃』。

夏椿 一

日毎、その強さを増してゆく初夏の日差しの下に、白く夏椿が咲き初めている。

まだ開ききらない花卉はなびらの奥、どこか不吉に垣間見える紅べにと橙の色。

いつにない感覚に眉を顰めて、私は庭に視線をめぐらせる。

—— 梔子に山法師、夏椿。

夏空に咲く白の花はみな、白昼の光の中で焦がれるような死を思わせた。

甘やかに死臭をくゆらす梔子の花、累々と連なる屍みのごとき山法師。夏椿は、まるで打ち捨てられた髑髏むくわうのように。

また再び、多くの血が流れるような悪い予感はない。

けれど確信めいた胸騒ぎがあつて、午日中のじりじりと暑い日差しを仰いで一つ、小さな嘆息をした。

一応、占せんを立てておいた方が良くかもしれない。

眩しい陽に目を伏せて、屋敷内に戻ろうと踵を返す。と――

「姉様……！ 氷羽姉様！」

「お待ちなされ、姫様……」

賑々しい声と共に、ばたばたと屋敷の奥から近付いてくるくる足音が複数。

思わず足を止めて待ち構えていれば、小柄な影がまるぶようにして

外へと躍り出てきた。

結び上げたやや癖のある黒髪や、愛らしい薄紅を重ねた袿かきが目にも鮮やかに。

何時もよりもどこことなくめかし込んだ格好を、派手に乱して駆け寄ってくる——妹、柚葉。

「どうしたの、そんなに慌てて」

勢い余って飛び込んできそうな妹を手で制し、私は落ち着かせようと問いかけた。

息を切らしてその後を追ってきた侍女達には、下がるように目で促す。

「姉様聞いて、父様が……！」

勢い込んで言い募ろうとする、涙交じりの声はいつもながらに愛らしい。

一体、何が——涙交じり？

真っ赤に上気した幼い顔をよく見れば、泣いた後のように目縁がつすらと、赤く腫れていた。

「父様が、私が、さっき……」

「誰？」

「え……？」

「誰に泣かされたの？ その下衆、人前に出られないようにしてあげるから」

心無い侍女か、父様の側近達か。

或いは先程から口走っている言葉からして、父様か——それは少し頂けない。

それ以外の誰かであれば、取り敢えず社会的に抹殺しようと心に決める。のだが。

「えと……父様だから、それはちょっと無理、だと思つよ?」

やや引き攣つた顔で告げられた言葉に、短い野望は呆気なく崩れたのだつた。

「……まあ、父様なら三晩眠れないように呪^{しゅ}を掛ける位で、手を打つしかないか。」

私が唯一尊敬し、苦手に思ふ人物である。

「あ、呪は掛けるんだ……。うん、そうしてくれると嬉しいかな」

「……珍しい。本当に、どうしたの?」

いつもであればそんな事、止める筈なのに。

目を瞬かせれば、柚葉ははっと気を取り直した様子で、再びじわりと涙を浮かべた。

「そう、聞いて!　っていうか止めて来て!」

「何を?」

「父様が……私を、入内させるって……っ」

悲愴な声で言いつのる妹を眺めながら、ぼんやりと考える。

帝を呪殺。出来るだろうか……？

夏椿 二

大陸の東の果て、黒海に大きく張り出した半島の国、齋世^{とくせい}。

その西端、唯一の他国との国境に位置するのが此处——篠井の地だ。時に隣国との戦の最前線となり、時に隣国と中央との緩衝剤になつてきた土地。

中央から領主の派遣される他とは違い、篠井に限っては代々続く国守の家系、久瀬氏に治められている。

何故か？

二百年前、この国が隣国セリカと争っていた頃、此处は独立した一つの小国だった。

かつての篠井の国守は、争う二つの大国に挟まれて存亡の危機に瀕していたこの地を齋世の属領とする決心をする。

齋世に属し従い、対セリカの最前線となる代わりに、国守としての久瀬氏を残すという条件で。

以来二百年、細心の気を払いつつ篠井を治め続けてきた久瀬氏——その当代が、今私の目の前で微笑んでいる父である。

「どういうことです？ お父様」

「何がだい？」

ゆつたりと足を組み、脇息に身をもたせかけて飄々と返す父。

この人にだけは適わない、といつも思う。

ただし適わないからといって、逃げ腰に相對するのは私の主義に反するので。

「お分かりにならない？……お父様も案外察しが悪くていらつしやる。ああ、それともお歳を召してほけましたか」

「言つね、お前も。私は未だ四十……ぼけるには大分、間があるうちに」

「未だ四十で、『西の古狐』と呼ばれてらつしやる事はご存知でない」と

「……ほう、それは。誰が言い出したか知らないが、随分と目の悪い方がいたものだ」

目を眇め、さも心外だともいう風にしらりと往なす。

その微笑が否が応にも相手を逆撫でて、知らぬ間に余裕を奪っているのがこの男のやり口だ。

私にもこりと笑って見せて、氣取られぬように息をついた。

父のようになる為には、少なくともあと十年。

その頃には父もその老獪さにますます磨きをかけているだろうから、きつと一生適わないだろうけれど。

見習うには、この上ない手本である。

——しかし今日はさつさと、本題に入らなくては。

「柚葉の入内のこと……どうして隠していたのです？ 何もおつしやらずとも、隠してさえいなければ私の耳に入った筈」

文字通り、宮処みやこから篠井から、各地に私の『耳』となるものは飛ばしてあつた。

当人に告げられたということは、もうかなり纏まつた話なのだろうに——それが今の今まで気付かないとは。

因みに柚葉はこの場には居ない。

私はあの愛らしい妹を溺愛はしているけれど、その頭を過信してはいないので。

「気付かなかつた割には、なかなかの自信だね」

「事実ですから。……いえ、それよりもどういうおつもりですか？
すめらぎ皇とは必要以上に近くなりすぎない、それが我が一族の家訓だとは、お父様の言」

この国において、篠井——ひいては久瀬氏は常に、微妙な立ち位置におかれてきた。

二百年前の協定を慮つてか、中央は決してこの西端の地に必要以上の干渉を加えようとはしない。

けれどその分警戒を緩めずに、目を光らせ続けてきたのだ。

万一不穏な動きがあれば、すぐにでも潰せるように。

国内に中央の直轄でない土地があるという状態は、本来国にとって

は不利益しかもたらさない。

久瀬が弱体化すれば、朝廷はこれ幸いとばかり制圧にかかるだろう——といって余力を持ちすぎてもまた、危険視される。

容易に手を出すことは出来ない、けれど焦ってどうこうしなければならぬ程の脅威ではない。

中央に対し、そんな絶妙の力関係を維持し続けることが、篠井がこの国で生き残るための術^{すべ}だった。

「皇家と姻戚関係を結ぶなど……久瀬にとって、避けるべき最たるものでしょう」

外戚として力を握る。

それは一時の栄華を極めるのには最も適した手段だが、その分浮き沈みが激しく、危険も大きい。

外戚とは色々な意味で、大局を作り易く大局に巻き込まれ易い立場なのだ。

それを敢えて行うということは、何か余程の思惑でもあるのだろうか。

問いかけの意図も含めて断言すれば、古狐は手にした扇をぱちりと閉じる。

「後宮政治を行うつもりは、特に無い。ただここらで、皇家そのものの懐に入っておくのも、悪くないかと思ってね」

「……と、いうと？」

「先の政変では、我が一族も陰に日向に随分と力を尽くしたものだ。立場としてはもう完全に、新帝の側と見做されている……ならばもういっそ、その治世を完璧に支えるのが得策と考えた」

表だった干渉は行わず、後宮を通して陰で支援する。

それならば表立ってはこれまでと変わらずに、安定した力を保っていられるだろうと、にこやかな顔で父はのたまった。

「万^{きんじちゅう}一今上が廃されても、こちらにさしたる害は無い……帝の懷に入っておけば、向こうもまず篠井に手を出しはしない、と？」

「ああ。帝は若く、ようやく政争を乗り切ったばかりの現政権はまだまだ脆い。

皇家にとつても、久瀬の全面的支援は願っても無いことだろうね…

…そもそも、入内の話は先方から持ちかけられたものだ」

それはそうだろう。過ぎるほど慎重な父が、こんな短期間で策を為そうとする訳がない。

今度はこれ見よがしに空を仰いで、私は大きく息をつく。

「……全く、相も変わらずとんだ古狐でいらっしゃる。帝は単純に喜んでおみえでしょうに」

「さあ、それはどうだろう。あの若さにしては、彼もなかなかの切れ者だ……こちらの意図を察していたとて、自分の利に適えば知らぬ顔で話を進めるだろう」

「確か、私と同じ……まだ十九でしたか。こちらに一杯、食わせようと思える可能性は？」

若さに任せて無茶な、けれど侮れない手を打ってくるかもしれない。ありえぬ話ではないだろうと尋ねれば、私が唯一尊敬する人間は、食えない顔でにこりと笑んだ。

「それを防ぐ為に、柚葉を送り込むんじゃないか……あの子を見て何か裏があると思う人間は、そうそういないだろうから」

つまりはあの天真爛漫な妹で懐柔し、油断させると。

——ならば。

「実際に動き、父様との繋ぎ役になる者はご入用ですか？」

「ああ、……それは是非とも欲しいものだね」

ことりと首を傾げた私に合わせ、自分も首を傾げる狐が一匹。

「……」

「……」

「……それでは私が参りましょう。丁度、宮処には用もありますし」
言わされたことに屈辱感を覚えるけれど、着いて行く口実を得ただけでも良しとしなければならぬだろう。

後宮。朝廷。

——策謀渦巻く伏魔殿に、純真で馬鹿で可愛い阿呆な妹を一人で行かせられる訳がない。

夏椿 三

先の政争。

それは二年前、当時の帝が突然身罷みまかつたことに端を発したものだ。
た。

崩御前から皇太孫に定められていたのは、かつて若くして亡くなつた帝の一の皇子の、その第二子——当時十七歳。

先帝の嫡孫である兄宮もいるのだが、諸事情により二の宮が東宮に立てられていた。

政権争いは先帝の孫二人の間で勃発し、血を分けた兄弟間での血腥い争いとなつた——訳ではない。

先帝の皇子は、もう十年以上前に不慮の事故で逝つた先の東宮の他にもう一人。

その、皇太孫と兄宮にとつては叔父に当たる人物が、未だ経験も浅く若い東宮の即位を一旦延期して、彼が成長するまでの臨時の繋ぎとして己が帝位に就こうと宣言した。

勿論——それがただの臨時である筈もない。

『臨時』の間に朝堂を完全に掌握し、何らかの理由をこじつけて東宮を排そうとする腹積もりは誰の目にも明らかだった。

そもそも、いくら若いとはいえ十七歳は立派に成人を済ませた年齢だ。

その年齢は即位を延期する理由としては余りに不十分であり、尚且つ彼の登極トウキョクは、祖父に当たる先帝のたつての望み。

あまりにお粗末な目算に臣下らも失笑を禁じえず、葬儀の席で行われたその宣言はあっさりと流される——筈だった。本来ならば。

先の東宮の腹違いの弟である彼にとって幸運だったのは、その母が当時朝廷で最も大きな力を持っていた一族、物集^{もづめ}氏の出であり、本人も物集の嫡流の女を娶っていたこと。

東宮らの母は皇家の出身。

聡明な東宮が即位して自分たちが排斥されることを危ぶんだ物集氏は、強い繋がりを持ち、扱いやすい木偶である叔父宮を担ぎ上げて勝負に打って出た。

即ち、有力な貴族達を脅して宥めて賺して、時に露骨な餌で釣りもして、彼の支持に回らせようとした——端的に言えばただそれだけの事である。

——そもそもの発端からして、彼が分不相応な帝位を望んだのも外戚の口車に乗せられたため。

先帝の目が無くなった途端、物集氏がその策に出るであろうことは、先帝が身罷る前から予想されていた状況だった。

崩御があと三年早ければ彼等の目論みは成っていただろう。

けれど若き東宮は、地位を脅かされて何も出来ずに泣き寝入りするような愚鈍ではなく。

結局、二年という長過ぎる大喪——実情は血で血を洗うような政争の期間——を経て、今年の初め、若き帝が帝位を継いだのだった。

それでは私達は、政争の中でどう立ち回ったか？

激しい権勢の浮き沈みが、久瀬氏にとっては何よりの敵。故に常ならば、中央での政争には極力中立を貫くのだが、この度の政争ではそうも言っていられなかった。

物集と久瀬の間には、物集が五十年程前に台頭してきた頃からの因縁がある。

物集は元々、軍事を得手として朝廷に仕えてきた氏族。

だが百年前のセリカとの戦を最後に大きな争いは絶えて久しく、物集氏は活躍の機会もなく燻っていた。

それが五十年と少し前、物集の娘が後宮で帝の寵を受けたことでそれなりの権勢をふるうようになり——欲が出たのだらう、自分たちの本来の場で、本領を発揮して栄達を、と考えたらしい。だが本領を発揮しようにも、戦場がない。安定している隣国との関係を崩す程の発言力もない。

そこで彼等が目を付けたのが、篠井だった。

久瀬が不穏な動きをしていると盛んに触れ回り、噂を流して朝廷の不安を煽り立てて戦を起こそうと。

私の祖父である当時の当主の尽力により、幸いにして攻め込まれることはなく済んだものの、以来久瀬と物集は、対外的にはそこはかとなく陰悪な関係にあり、実情としては互いを忌み嫌ってきた。

結局物集氏は戦を起こすことは叶わず、それから後宮政治で力を伸ばし続け——その結果が政争に敗れ、中央から放逐された現状である。

そのために久瀬は、新帝の側に付いたといっても過言ではない。

険悪な関係にある物集氏がこれ以上増長することは、我々にとって大きな危機を生み出すだろう。

故に久瀬氏は、常になく積極的に政争に介入して新帝を盛り立てた。陰謀策謀、暗殺に懷柔——二百年の間、緩むことなく蓄え続けてきた力を遺憾なく發揮して。

かく言う私も、生まれ持った呪術師としての能力を最大限に揮わせていただいたので——さしずめ新帝にとっては恩人とも言えるのだけれど、向こうがそれを知らない以上、恩に着せるつもりもない。

ただしその分、柚葉を通してせいぜい利用させて貰いましょう——と、狐の前を辞してひとりごちた。

勿論、当の妹はそんな政局など知る由もなく。

「姉様……！ 父様はなんて！？」

愛らしい衣を翻してぱたぱたと駆け寄ってくる柚葉に、私はにこりと笑いかける。

普段から表情筋が固いという自覚はあるのだけれど、時たま笑うと皆が怯えたように後ずさるのは何故だろう。

可愛い妹もその例に漏れず、凍りついたように足を止めた。

「入内は……もう翻せないみたい。色々と事情があつてね」

冷静に考えてみれば、私に入内に反対する理由などない。

——どうせそのうち、どこの馬の骨とも分らないような男が忍んで来るようになることを思えば。

政治的駆け引きがなくとも、最愛の妹の伴侶として帝はかなりの好物件なのだ。

若くしてこの国の頂点に立つ最高権力者で、性状は聡明かつ思慮深く、ついでに美形。

それに伴う数多の危険は、全て私が取り除いてやれば良いだけの話。

「ひ…そ、んな酷い！ 会ったこともない帝の下へ入内するなんて、絶対に嫌」

なぜか怯えつつ、それでも果敢に抗議する柚葉に、育て方を間違ったかと不安になる。

大貴族の娘なのだから、政略結婚など当然のことだと諭しておくべきだったか。

「大丈夫、私も付いていくから。まさかまだ、『将来は刃澄と結婚する』なんて思っていないでしょう？」

十年前、十一歳の柚葉ににこにこそう告げられた時に、初めて私は明確な殺意を持って人を呪殺しようと考えた。

——ちなみに相手は、幼馴染の現武官である。

「まあ、それは……。って、姉様も来るの！？」

「勿論。何か文句でもある？」

嫌がられたらどうしようか——取り敢えず腹いせに、刃澄あたりを殺すことにする。

「いえいえいえ、そんな滅相も無い……あ、でも入内っていうなら、姉様がすれば良いじゃない！」

名案を思い付いたとでもいうように、ぱっと表情が華やかになる——ああ、本当に可愛くて堪らない。
が、その案は残念ながら没である。

「……確かに、三つ上の姉を差し置いて、妹が嫁ぐのは外聞こそ悪いけれど。でも私は入内できないから」

「え、何で……あ、もしかして帝は、姉様と同じ歳？」

本当は他にもっと重大な理由があるのだが、ここは頷いておいた。
この国で、同じ年に生まれた者同士の婚姻は確かに縁起が悪いとされている。

「えー、そっかあ……でも、私は嫌だからね！」

なんやかんやでうやむやになりそうだったのに、矢張り嫌なものは嫌らしい。

柚葉の場合、他に好きな男がいるとか帝が嫌だとかいうのではなく、単にまだ自分が嫁ぐということに抵抗があるのだろう。

こんなことなら、私がもつと早く通う男の一人でも捕まえておくべきだったか、と息をつく。

けれど暇を持て余した貴族達が腐るほどいる宮処ならいざ知らず、篠井で王にも等しい久瀬の、一の姫のもとに忍んで来ようとする無

謀な男などいる筈もなく。

不本意ながら、此処は奥の手に出るしかないだろう。

「柚葉……帝は、刀の達人だとか。正妃として入内して、上手くいけば毎日手合わせして貰えるかもね？」

刀と言った途端に、大きな目が輝いた。

無邪気な妹は、屋敷の奥深くでおつとりと過ごすようなお姫様ではなく、かなりのお転婆だ。

特に刀の扱いに秀でているらしく、成人しても未だ幼なじみの武官と手合わせをしていたりする。

「本当！？　じゃあ私、入内する！」

もう十六にもなるのに、十に満たない子供のように単純な妹は刀一つであっさりと説得された。

——ああ、この悔しさをどうしてくれようか？

柚葉と別れて自室に戻り、控えていた侍女達に人払いをさせる。

前庭に面した簀子へ出ると、強い日に当てられた夏椿が、変わらず白々と咲いていた。

強く、指笛を二度鳴らす。

暫く待てば何処からか、飛来する綺麗な瑠璃色の影。

美しい声で囁るその鳥——大瑠璃は、差し出した私の腕にとまる。

「お前と同じ名を持つ鳥に、言伝ことづてを」

そう呟いて、伝言を囁きかけた。

つぶらな双眸で私を見つめていた鳥は、高らかに鳴くとばつと飛び去ってゆく。

庭を抜ける鳥影にかすめられ、髑髏むくろがぽとりと落ちた。

薄ら氷 一

——それから半年後の春、花零月はなこぼれつきの宮処。

その一角、内裏にも程近く建つ久瀬氏の邸に私達——私と柚葉と、その他大勢——はいた。

入内の話が纏まって、篠井から上洛したのが一月前の鳥来月とりくつき。

今は数日後に迫った入内の儀に向けて、宵刻にも関わらず、屋敷中の人々が慌ただしく立ち働いているところだった。

「姫様の新しい御装束はどこ!?」

「調度の手配をすぐにして! こんな几帳を内裏に持ち込んだら、良い笑いものでしょう!」

幸いにして、篠井から連れて来た優秀な侍女達のおかげで私の出る幕は無い。——いや、それ以前にあそこに首を突っ込みたくはない。

「柚葉」

もういつそ、殺氣立っていると表現しても可笑しくないような忙しなさを前にして、手持ち無沙汰な顔できよろきよとしている妹に声を掛けた。

「そろそろ奥へ入って、今日はもう早く休みなさい……このところ、ろくに寝てないでしょう」

「う……はい」

いくら柚葉といえど、流石にあと数日で入内となれば緊張していて当然だ。

決まり悪げな表情で俯いた妹を、手で差し招く。

「？」

寄って来た彼女を屈ませて、私はその額にそつと唇を付けた。

柚葉ももう慣れたもので、呪を呟く間も大人しくされるがままになっている。

『ふるべふるべ、ゆらゆらと……幽^{かそ}けき眠りを……』

昔から、この妹が寝付けない時にいつも掛けてきた子供騙しのよう
な呪^{まじな}いだ。

いくら幼くとももう子供ではないのだから、これからは控えよう、
と篠井を出る時に決めた筈だったのだけれど。

——甘やかす癖は、一生治りそうにない。

「…ありがとう！」

結局、嬉しそうに破顔する柚葉を見てしまえば、もうそんな事はど
うでも良くなるのが常のこと。

おやすみなさい、と明るく言い残した妹を見送ってから、私も静か
に立ち上がる。

慌てて駆け寄ってくる侍女達を目線で制し、一人で自分の座所へと
引き上げた。

——人気も無く静まり返った対屋^{たいのや}は、燈台の灯も消えて薄暗い。端に寄せられた、漆塗りの櫃^{ひつ}の封印を解いて蓋をごとりと持ち上げる。

中に収められていたのは、墨染めの装束が一式。私は重たい袷や長袴を脱ぎ落とすと、見慣れたそれを手早く着込んでいった。

陰に溶け込む闇色を纏い、それまでの装束を櫃に仕舞い込んでしまえば、最早久瀬氏の一の姫の姿は跡形もなく。最後に、これもまた墨染めの袷^{かす}を被いて立派な不審者となった私は、半開きの妻戸の陰へと目を向ける。

「灰鳴^{かいな}……居るのは分かってるから、早く出て来て」

「あ、はい……」

しおらしい応えと共に、すごすごと現れたのは長身——あくまで女性にしては——の人影だった。

短い藍色の単衣に包まれた、肉感的な肢体。

目鼻立ちのくつきりと派手な、艶^{あで}やかな美貌。

一見、ひどく押しの強そうな美女に見える彼女——灰鳴はその実、どちらかと云えば控えめで気の弱い性質^{たち}である。

「隠れて控えている必要は無いと、言っているのに」

「申し訳ありません。ただ、これが習い性なものですから」

——ただしその分、過ぎるほど頑固ではあるのだけれど。因みに彼女の祖父と父を見る限り、どうやらその性格は、血筋的な

ものであるらしい。

「氷羽…いえ、『鵠^{めえ}』様。出られるのなら、私もお連れを」

すつと腰を折る彼女に、私は小さく笑い掛けた。

「勿論。用意は出来ている？」

「はい……この対の者達は皆、眠らせました」

如何な性質であろうとも、優秀な逸材であることだけは変わらない。

「そう、なら行きましょうか…『大瑠璃』」

互いに、互いの呪術師としての名を呼んで、私達は次第にその深さを増す宵闇へと紛れてゆく。

篠井の東端、中央の直轄領との境に位置する三枝^{さんえぐさ}の里。

其処が、招かれざる者を全て拒絶する呪術師達の隠れ里であり――
長の娘である灰鳴の故郷、かつ私が齡^{よわい}七歳までを過ごした土地だ。

二百年前に篠井が斎世の属領となる、その少し前。

朝廷に仕える一人の呪術師が、政争に巻き込まれて反逆の廉^{かど}で宮処を落した。

一族郎党共々に、命からがら逃げ延びた彼らを匿ったのが、篠井の地――ひいては久瀬氏であったという。

その呪術師達が中心となり、中央の目を逃れて作り上げた隠れ里、三枝。

流れの呪術師を少しずつ取り込んで、次第に規模を増してきた彼の地と久瀬には、故に強い結び付きがある。

支配と従属、という程の上下はない。

この二百年ずっと維持されてきたのは、もっと緩やかな庇護と尽力の関係。

柚葉の入内に際し、私は幼馴染であり心強い協力者でもある灰鳴を呼び寄せた。

新たに雇い入れた侍女たちに紛れた彼女は、篠井の古狐を除けば唯一、私の裏の顔を知る人間である。

裏の顔——即ち当代一の呪術師、鵺。

我ながら恥ずかしいその呼称が、二年前からの私の二つ名だった。

人は言う。

曰く。

闇に紛れてその正体を顕さず、物悲しげな声を発する——実際は、聞き取れないように細い声で話しているだけなのだが——鵺鳥は、三羽の鳥を従える。

実際に鳥の姿をした三羽の式と、それらの名と同じ二つ名を持つ、

三人の呪術師。

即ち——大瑠璃、鶯、そして駒鳥。

その名の通り美しい瑠璃色をした大瑠璃に、派手さには欠けるが愛らしい鶯、明るい橙色が一際目を惹く駒鳥。いずれもその囀りの美しさで知られた鳥だ。

得体の知れぬ呪術師達には少し愛らしさが過ぎる気もするが、私が冗談で使いはじめた三つの呼称 - 通称三鳥^{みつとり} - と『鵲』の名は、今や半ば伝説と化していた。

- ーそれこそ、冗談の様な話なのだけれど。

そしてその三鳥の一羽である大瑠璃こそが、灰鳴の二つ名だ。

残りの二人は――まあ、後ほどにでも。

薄ら氷 一（後書き）

少し補足を。

この話は設定として平安朝風ではありますが、あくまで異世界が舞台です。

物語の都合上、実際の平安朝とは大幅に異なる点も多くありますので、悪しからずご了承ください。

薄ら氷 二

体に沁みつき、匂い立つ”死”がひどく厭わしい。

直接手を下した訳ではない、まして血を浴びてなどいないけれど、それに触れてしまえばもうどうしようもなく、重たい影に縛られる。

ゆらめく陰は、いずれこの身を蝕んでゆくのだろうか。

焦燥に、疾うに麻痺した心が揺らぐ。

路地裏に死をくゆらせて立ち籠める、深い闇の奥底に、遣る瀬ない吐息は消えていった。

一仕事終えてから、どれくらい立ち竦んでいたのだろうか。

「…鵜？」

伺うように掛けられた声に引き戻されて、私はその主をちらりと見やる。

被いた衣から、赤みがかった茶色の髪を覗かせた青年。

どことなく案じるような顔——いや、顔は見えないので雰囲気と言うべきか——をしている事に、ふと苛立ちを覚えてかぶりを振った。

「……」

戸惑うような素振りで肩を竦めた彼は、それきり何も言わずに背を

向ける。

三鳥の一羽、『駒鳥』の名を持つ青年は、優れた呪術師だ。

『鵜』の、らしくもない物思いに何か感じる所でもあったのだろうけれど、生憎、それを晒すつもりもない。

あっさりと離れてゆく背中を見送って、私は背後の板塀にとんと体を持たせかけた。

彼と、路地の奥で何か話し込んでいる大瑠璃と鶯。

鵜が従えると言われる三鳥は実際のところ、私の下に付いている訳ではない。

四人で纏まるようになったそもそもの契機^{きっかけ}は、駒鳥に乞われての助力から。

二年前に始まった、その共闘関係はいつしか『仲間』と呼ばれるようなものになり、さらにその中で最も能力の高かった私が周囲から頭目と見做されていった。

それを全員が訂正せず、有耶無耶のうちに受け入れた結果、今に至っているというだけで。

巷では他の三人が鵜に心酔して付き従っている、などと言われているが、実際はそんなものでない。

仲間といえど、互いの素性も何一つ知らず——という事に一応なっている——、互いの事情は一切詮索しない。

ただ、仲間内での協力の要請に無条件で力を貸し合うだけの関係。信頼も信用もある、けれどそれ以上は何も存在しない、『仲間』は私にとって都合が良くて、尚且つ思いのほか心地の好いものだった。

——最も、こと駒鳥に関しては、それもあと数日で終わるだろうけれど。

「……三人とも、今日は助かった」

意識して、か細く声を紡ぎだす。

この二年ですっかり馴れきった些細な小細工は、それでも鶴の素性を隠すのに大きな貢献を果たしているだろう。

いつも墨染に身を包み、けして素顔を顕わさず——灰鳴以外の二人は、私を少年だと思っている筈だった。

「まあ、あれ位なら大した手間でもなし。持ちつ持たれつ、詮索はなしが一番だ」

「そうですね……。ただ、このところ駒鳥の方は落ち着いているようです」

「ああ、こちらにもようやく、使える手が出来たものだから……」

駒鳥と大瑠璃が口々に言う。

——今宵、私が持ち込んだ仕事は一人の貴族の始末。

念入りに仕込んだ呪によって、あの貴族は数ヶ月でじわじわと衰弱していくだろう。

柚葉の入内にあたりどうしても目障りだった彼に、恨みなどある筈もないけれど。

人を容易く手にかける罪悪感、疾うの昔にどこかへ散って、ただその重みと死臭が纏いついて離れない。

けれどその重みに引きずられ、足を止めることは叶わないのだから、私は。

「……は、」

らしくない感傷につ、と目を眇めて昂然と面を上げる。

視界の端に映ったのは、鷺の穏やかな笑み。

市井の呪術師として熟練した腕と経験を持つ彼は、時折全て見透かしたような顔をして、けれど何も言ってきはしない。

呪術師として、というよりは、単なる人生経験の豊富さからくるその距離の取り方が心地好くて、だから私は不敵に笑ってみせる。

「……では、仕事にも片が付いたことだし。今宵はこれで解散としようか」

四人のうちで圧倒的に年長の鷺は、私の様子など素知らぬ風で自然と流れを仕切る。

思慮深く穏やかな人柄をして、それでも一筋縄ではいかない食えなさを併せ持つのは呪術師という人種ゆえ。

この国において、宗教という概念はひどく希薄なものだ。

宗教と呼べるようなものは、人々が小さな村単位で暮らしを営んでいた時代に信仰されていた祖先崇拜が、そのまま薄く、広く残っている程度。

かつてこの国に、外^とつ国からもたらされたという佛教や十字教はまったく普及しなかった。

今もって齋世には、人々が信じる超常的な存在、あるいは国として体系づけられた確固たる信仰がない。

――？けれど呪術師は、徒人が関知しえない人知を越えたものの存在

を知り、それを用いて異能を揮う。

齋世における呪術とは、宗教祭祀とはなんら関わりのない個人の異能なのだ。

ゆえに呪術師はそうでない者と相容れないし、徒人は呪術を解するという感性を持ち得ない。

まさに正しく、分かるものにしか分らない。

私の最愛の妹でさえ、私が用いる人ならざる力を理解することは叶わない??そして逆もまた、しかり。

それゆえに、呪術師という存在が表立って一つの職として扱われることはまずもって無い。

国や個人に飼われるか、あるいは三枝のような地で、同族同士だけで生活を完結させてしまうか。

私や駒鳥のように、裏で単なる手段として呪術を用いるのでなければ、呪術師として生を享けた者にそれ以外の道など無いに等しい。

しかしそんな中で、鶯は公然と『呪術師』と名乗り呪術で生計をたてている。

非常に腕が立つ彼は、尚かつ、異端とも言える存在だった。

三人と別れてその場を離れ、私は灰鳴より一足先に屋敷に戻る。墨染の衣はそのままに、夜闇に寝静まる対を抜けて前庭へ出た。

未だ冷たさの残る風に吹かれて、青く潤んだような夜の底を往くこと暫し。

ふい、と見えない糸に手繰られるようにして、私は静かに凧いだ夜

空を仰ぐ。

低くかかる春の初めの月は、どこか朧げに揺らいで見えて、また再びらしくもない感傷に囚われそうになる。

この頃の、いつにない自分の揺らぎを自覚はしていても為す術はなく。

悪い気をすべて吐き出してしまおうと、一息をついて足を踏み出せば、池の水際に張った氷がぴしりと鳴った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6546u/>

宵の氷鏡

2011年8月15日01時34分発行